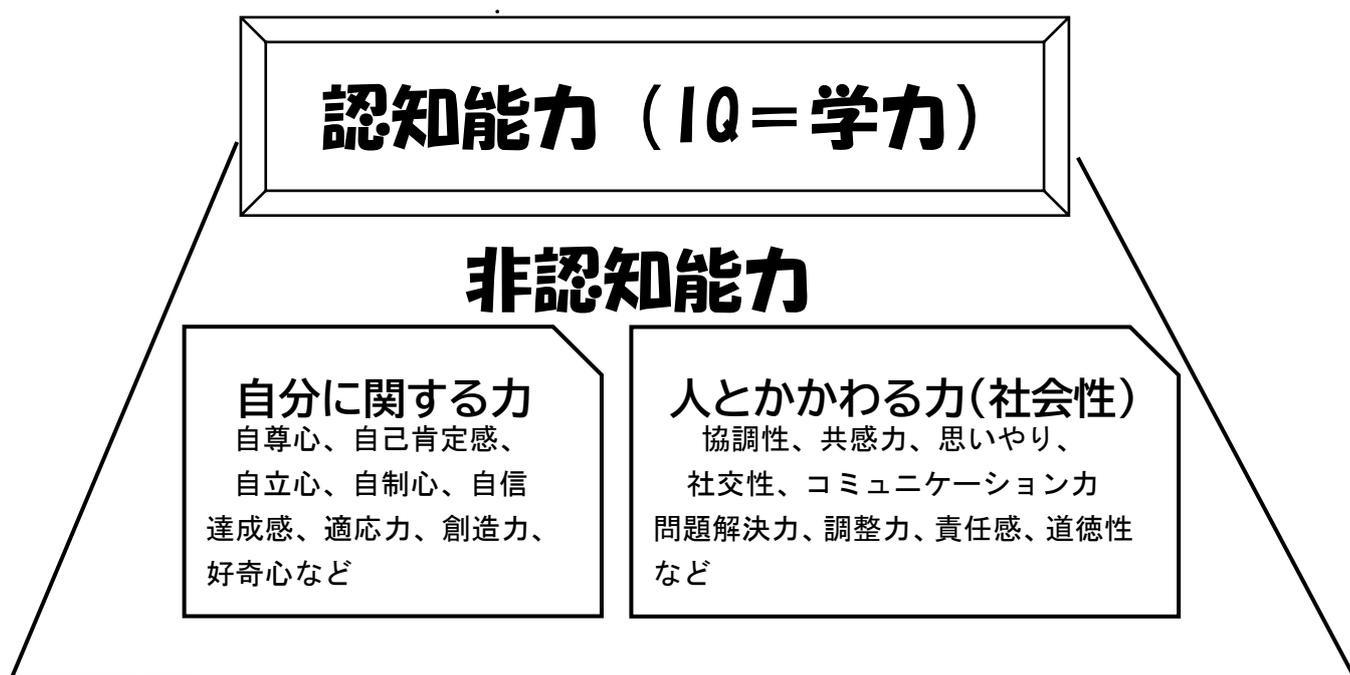


2022年12月1日

非認知能力は人生の土台

11月の市議会での質問を契機に「非認知能力」について改めて調べてみました。わかりやすかったのが岩手県医師会の図です。紹介します。（私が少し用語を追加しました。）



認知能力とは、いわゆる学力のことで、テストなどで測ることができます。それに対して、非認知能力は数値で表すことが難しいとされています。また、この非認知能力は元々人が生きていくうえで大切なものであり、「雪だるま式に成長していく」ともされています。

非認知能力は大きく二つに分けることができます。岩手県医師会の図から一つは「自分に関する力」、もう一つが「人とかかわる力」、つまり社会性です。以下にこの二つを説明します。

まず、「自分に関する力」とは、自尊心（プライド）や自己肯定感、自立心や自制心（忍耐）、さらには自信などがあります。一方、「人とかかわる力」（社会性）は協調性や人に共感する力、思いやりや社交性、道徳性などがあります。人とつながって共に生きていく力です。そして、この二つの力が合わさって人それぞれの「個性」となると考えられます。

最近、学校や園では子どもたちの認知能力の土台となるこの非認知能力をいかに高めていくかが重視されています。子どもたちが大人になり、これからの変化の激しい予測困難な社会を生き抜いていく大きな力になると言われているからです。具体的には校庭の毎日の授業や保育の中で、また、運動会や合唱大会、文化祭や校外学習などのさまざまなイベントで、教職員の個別支援や友達との仲間づくりをとおして子どもたちのこうした力を育てています。とりわけ小中学校では、教科学習（認知能力の育成）の中でもこの非認知能力の育成を

図ることが合わせて求められているということを心に留めておきたいですね。

※ペリー・プレススクール（就学前）・プロジェクト

何年か前に『教育長だより』で紹介しましたが、アメリカの経済学者：ジェームズ・ヘックマンさんは、幼児教育に注目しました。彼は「限りある財源を教育のどの段階に投入することが一番効率的か？」という研究（1962～67年）を行い、これによってノーベル経済学賞を受賞しました。

彼は非白人の貧困家庭の子ども（3～4歳児、アメリカでは州によって5歳から小学校へ入るため、この年齢とした。）50人あまりをペリー小学校付属幼稚園（ミシガン州）で1日3時間預かり、先生が週1回家庭訪問をするという取組みを1年間行いました。そして、それ以降、定期的に（3～11歳は毎年、14歳、15歳、19歳、27歳、40歳、現在も続いています。）この子どもたちと、同じような境遇で幼児教育を受けなかったグループの人生の追跡比較を行いました。

結果は、中学校の留年やドロップアウト率（アメリカでは学校に行かなくなる生徒がいます。）、高校卒業率、月収（貧困家庭）、持ち家率、生活保護受給率、犯罪収監率などの多くの指標でこの50人の方が圧倒的によかったということです。ただ、IQ（知能指数）に関しては、7歳ぐらいまではこの50人の方が高かったのですが、8～9歳になるとほぼ同じ（以降も変わらず）になったということです。この社会実験の当初の狙いはIQでした。しかし、8歳ぐらいでその優位性は消滅したのです。しかし、研究者が心理学的な方法で数値化したところ、このプログラムを受けた子どもたちの非認知能力が育っていたことが分析されました。ここから、「子どもが幼児教育に通って自身の力を伸ばしたのではなく、通うことによって周りのさまざまな大人からの丁寧なかかわりを受け、そのことによって非認知能力を育むことができたから。」と結論づけています。当時、非認知能力という言葉はなかったようですが、「自制心」や「達成感」、「社会性」などと言っています。